

チリ 生食用ブドウの現状と課題

The Grape Reporter 2025年6月6日

5月下旬にチリで開催された国際青果物協会 (IFPA) 主催の朝食イベントの一環として、輸出業者であるスブソレ社のアンドロ・ヴィダル商務マネージャーがこのセクターの強みと課題に光を当てながら、チリの生食用ブドウの生産と輸出の現状について詳細なプレゼンテーションを行った。

このIFPAの会合では、果実・野菜業界の様々な関係者が集まり、青果物の輸出の将来、セクターの持続可能性、及び国際市場の主要プレーヤーとしてのチリの位置付けを維持するチャンスについて話し合った。

プレゼンテーションの中でヴィダル氏は、地域別の生産について分析を行い、チリの果樹栽培はコピアポバレー地域からクリコバレー地域まで1,200キロメートルに及ぶことを強調した。出荷シーズンは11月 (第45週) に始まり、翌年の第20週頃 (5月) まで続く。

量の面では、ヴィダル氏は、今シーズンは、主にバルパライソ、メロポリタン、オイギンス、マウレの各州から6,800万箱が輸出されて終了したとしつつ、主に干ばつにより、一部の地域で減少傾向にあると指摘した。

ヴィダル氏は「コキンボ州では干ばつの問題により減少している」と述べ、アタカマ州等の一部の州では安定している一方で、他の州では輸出量が大幅に減少していると指摘した。

スブソレ社の幹部である同氏が提起した主な不確実性の1つは、チリの生食用ブドウの実際の栽培面積であった。農業省農業調査政策局 (Odepa) の公式記録によると、ブドウは4万3千ヘクタールで栽培されている。しかし、民間の推計によると、輸出用として積極的に栽培されているのは2万5千ヘクタールに過ぎない。

ヴィダル氏は、「これは課題である。我々が思っているよりも多く植えられている可能性があるため、実際にどれだけ生産されているかを知る必要がある」と述べた。

同氏のプレゼンテーションでは、特に米国市場に焦点を当てた主要な輸出先のより詳細な分析や、輸出されるブドウの種類、さらにその物流上及び商業上の課題についても紹介された。

物流上の課題が出荷予測に影響を与える

ヴィダル氏が言及したもう一つの話題は収穫のタイミングであり、今年は大きな前進や後退がなく、チリの通常の収穫時期の範囲にとどまった。第12週 (3月中下旬) には出荷のピークを迎え、700万箱以上が輸出された。「かつてチリが約1億箱を出荷していた時、そのピークは毎週1千万箱に近かった」と同氏は振り返る。

「週別予測の精度は、100%物流能力に依存する」と同氏は述べ、果実輸出業者の団体 (Frutas de Chile) が幅広い業界関係者が参加する複数の作業部会を通じて主導した共同作業を強調した。同氏は、「業界の80%が関与しているため、合計の数値は通常正確である。議論の余地があるのは週別の数値だ」と指摘した。

ヴィダル氏は、出荷量の推定値と実績を比較したグラフを示し、特に出荷シーズンの序盤と終盤の週に注意を引いた。同氏は「すべてが完璧であれば、推定値どおりに出荷される。しかし、シーズンの終盤には大きな乖離がある」と言い、一部の果実が遅れて出荷された可能性がある一方で、それだけでは不一致を完全に説明できないことを認めた。「我々はこれを改善する上で大きな課題に直面している」と同氏は強調した。

輸出業者と米国市場

ヴィダル氏は、10年前にはチリに350の生食用ブドウ輸出業者がいたが、今日では200に減少したとして、「上位15の輸出業者が全国の取扱量の70%近くを占め、市場は依然として非常に集中度が高い」と語った。

市場に関しては、米国が引き続き最大の輸出先であり、2022-23年度には、3千万箱が米国に輸出された。イカ県で発生したストライキは、今年と同様の米国市場の崩壊につながった。翌年度には、4千万箱近くに増加し、2024-25年度には出荷の動きが様々で3,600万箱に減少した。(以下、米国市場の状況について省略)

(翻訳は情報の提供を目的としており、特定の企業や製品を推奨するものではありません。)